

# 日本記者クラブ会報

## ジャーナリストの独立性

理事長 酒 井 新 二

この度理事長に再選されました。昨年五月渡辺前理事長の残存期間を勤めろといわれ、止むなくお引き受けしたわけですが、一年はあっという間に経過してしまいました。ただ敷かれたレールに乗っていただけで申し訳ないと思っています。

しかし前理事長時代に築かれた財政基盤と各委員会のご協力によって日本記者クラブの運営は大過なくいつていると思います。いろいろの事情で今度交代が実現しなかったわけですが、もう一期だけはなんとか責を果たさねばならないと考えています。よろしく皆さんのご支援とご協力をお願いいたします。

それにしても外国特派員協会の役員選任が立候補制度で運営され、派手な選挙運動がくり展げられるのと

第113号  
1979年  
7月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F ㊟100  
社団法人 日本記者クラブ 発行  
電話 五〇三―二七二一(代)

対照的に、日本記者クラブの役員選任の形は、良くも悪しくもまことに日本的だと痛感します。同じジャーナリストといっても、日本と外国とは、これほどメンタリティーの違いがあるものかと驚くばかりです。

この相違はやはり日本と外国のジャーナリズムの体質の相違から来るものであると思われませんが、その相違の一つは、企業からのジャーナリストの独立性に関するもののように思われます。

### 個人の活力と自覚に期待

日本の場合にはジャーナリストの企業帰属性が強く、日本記者クラブについても、規約上、個人会員より法人会員のウェイトがかなり重いことになっていきます。外国特派員協会の

場合はもちろん、欧米の同種記者クラブはすべて個人会員制度です。ジャーナリストの社会的独立性、ジャーナリスト自身の意識が全く日本と異っているといえるでしょう。このいずれがいか必ずしも単純ではありませんが、やはり方向としては個人会員制度を目ざすべきではないでしょうか。

### 十周年記念行事

今年創立十周年で、これにちなんだ諸企画も着々と進められています。企画委員会で準備された記念シンポジウムも香港のフアライースター・エコノミック・レビュー紙のデビッド・ボナビア氏の参加が内定されていますし、また今年の新聞大会(那覇)に招かれたフランス・ルモンド紙の創設者ユベール・ブーブメリー氏の記念講演の開催も内定しました。

これらの企画を通じて、日本のジャーナリズムや日本記者クラブの将来のあり方などについて論議が深められれば、十周年記念事業としては、この上ない実のりを期待できるものと考えています。

## “サミット”で大平総理が会見

—五〇〇名の記者にゲストカードを発行—

六月の行事

六月のハイライトはサミット。しかし、これはあくまでビジネス・トリークなので、各首脳をクラブゲストとして迎えることは日程等から考えても、困難との判断で、招請状は出さなかった。

が、直前に国賓として来日するカーター大統領には何とかしてクラブに来てもらいたいと思ひ精力的に動いた。

昨年12月、カーター大統領に対



するクラブの正式招請状を、マンズフィールド駐日大使に手渡し、同大使にも協力依頼をし、その後も機会あるごとに要請をくり返した。

また、今年に入って四月には、サミット関連の各国大使館のプレスアタッシュを昼食に招いて、各首脳に同行する閣僚等が、当クラブを利用しての会見を急に希望するような場合でも、全面的に協力できる体制を整えていることを伝えた。

一方、サミット直前には、大平総理を招いて、ホスト国としての立場から抱負、運営姿勢を示してもらおうよう交渉をした。

以上がクラブとしてのサミット関連での対応の概ねだった。

何よりも、結果としてカーター大統領の昼食会が実現できなかったのは残念だ。

この点事務局長としてクラブ員の皆さんに申し訳ないと思っている。

首脳会議に際して、各国から多くの随行者も来日したが、クラブはこれらの記者約五〇〇名に対して“ゲストカード”を発行した。

ゲストカードといえばさいきん各国から新聞協会などの招きで来日する記者がふえており、例えばソ連四名（五月）、ヨーロッパ二名（六月）、アセアン十五名（六月七月）、米十名（六月七月）などにゲストカードを発行した。

クラブ行事のメインは二十一日の大平首相記者会見だったが、今回は外人記者の参加者も多く、一時間と限られた時間を有効に使うため、日本語・英語の同時通訳を行った。この会見で、首相は「サミットに対してのドラマチックな期待は禁物である」と厳しい経済状況の下で開かれるこの会議に慎重な姿勢で臨む気構えを見せながらも、石油の節約については民生面を中心に行ない、産業維持への方向を示し、成長率についても六・三%の目標を変える必要はない、と内需を軸としての成長維持に強気を示した。

このほか二十七日にはエネルギーが主題のサミットに急拠来日が決まった、ジェームス・シュレジンジャー米エネルギー長官の記者会見が行われた。この会見が決ったのは前日二十六日の正午ごろ。各社や外人会員に対して電話で連絡したが、それでも出席者は約九十名。会見室も満員になり、それにテレビカメラ用のライトで熱気のムンムンする中で、最初予定した四十五分の会見時間を三十分も超過しながら、流れるような額の汗をクラブで用意したおしほりでふきふき、熱心に記者団の質問に答え、長官の真摯な人柄をのびせた。

十二日には、東京ラウンド交渉が終ってホッとした牛場信彦政府代表の昼食会、二十二日には世界の労組指導者会議、いわゆる労働サミット各国代表と、イエン・サリ・カンボジア副首相の二つの記者会見。ジャパン・アズ・NO1の著者、米ハーバード大学教授のエズラ・ヴォーゲル氏の講演会（十八日）、長谷川孝昭前ベトナム大使のブリーフィング（五日）、海上自衛隊の壁谷賢太郎氏の講演会（八日）なども行われた。

講演記録

アジアの人たちの  
意識構造

中根 千枝

(東京大学教授)

日本としてアジアにどう対応するか、ということよりも、その前にアジアというものをどういうように理解するか、ということが何よりも必要だと思ひますので、そこに主眼を合わせて話をしたいと思ひます。

ブロック化して考えられると思ひます。大ざっぱに中心的なところをあげますと、すぐ隣の中国、それからインド・インド亜大陸、そして東南アジア、日本。大体この四つにブロック化して考えると便利ではないかと思ひます。中近東というのは一応別にいたします。こういうふうに四つに分けますと、様々なことが対照的でありまして、違いが非常にはっきりしてまいります。

まず、パーソナル・リレーションズと申しますか、人間関係とその人たちの価値観あるいは考え方について触れたいと思ひます。思想などという大げさなことではなくて、いろいろな場面に遭遇したときにどういうふうにかえるか、というその考え方。パーソナル・リレーションとこの考え方というのは非常に密接に関連しております。

この点で四つのブロックの一つ一つが特色を持っているような気がいたします。

たとえば東南アジア諸国。ペトナムを除いては大体インド文化の影響を受けたところですが、日本、韓国は言うまでもなく中国文化の影響を受けているのですが、インド文化あるいは中国文化というものを受けて、それに触発されてそれぞれの社会を築いてきたわけですから、そのときに受けました影響は、われわれが今日持っている考え方や人間関係にはあまり影響していません。

思想とか論文レベルの物事には相当影響しているのですけれども、日常生活における考え方とか、人間関係にはあまり影響していません。

この地域は古くは中国文化圏、インド文化圏というように大別されておりましたけれども、現在問題としております観点から見ますと、そうではなくて、中国、インド、東南アジア、日本という、四つのブロックに分けられると思ひます。それをさらに二つに分けますと、前二者、すなわち中国、インドが一つのカテゴリで、東南アジア、日本がもう一つのカテゴリになるかと思ひます。

中国は原則、インドは論理

中国の場合は、考え方の基本といたしまして、原則を打ち出しまして、その例外を設けることによって物事をやっていく。非常にはっきりと原則を打ち出しますので、ともするとその原則でやっているかと思われがちですが、そうではなくて非常にうまく例外をそれ

に交錯させながらやるわけです。

そうだから、この点は大目に見てやってくれ、という意味で使われるのですが、中国の「情状酌量」というのはもつと客観的に見て、シチュエーション的なフ

クターがこういうふうだから、このケースはこう考えようというように使われます。非常にドライなものです。日本にこの「情状酌量」がきまると、非常にエモーショナルになりますけれども、あちらでは「情状酌量」というのは、裁判官が一つ一つのケースを考察するようない意味で行使されるわけです。

シチュエーションがこうだから、原則はこうだけれども、この場合はこう考える。中国人のものの処し方というものには、こういった傾向が非常に顕著に表われているわけです。

ところが、インドは原則などとは申しませんが、論理でまいます。論理が形を持ったときに哲学的な体系になるわけです。ですからインドのほうはダイナミックな考え方をいたします。

中国のほうは原則でいきますから、いろいろなものを考えるときに、フィックスします。たとえば天と地をフィックスして、そのあいだに人を置くとか、というように原則による枠組み設定がはっきりしております。しかし、インドはそうではなくて、論理ですから無限大に展開し得るわけです。

中国人が七世紀から九世紀頃、インドへ盛んに仏教を学びにまいります。玄奘など有名で、よくご存じだと思ひますが、当然、多くの仏典を持って帰って翻訳をするわけです。その翻訳を見ますと、インド人が何だかんだ言っているけど、要するにこれはこういうことだと、一文章くらいにしてしまおうですね。インド人は得意の論理を展開してぼう大な仏典をつくるんで

すが——その論理の展開自体が生命なんですけど——中国人はあまりそういうのは好きではなくて、要するにこういうことだ、と簡単にしてしまうわけです。

それが日本にきますと、要するにこういうことだ、というよりもっと簡単にして、禅などといってバツと一瞬で悟りをひらく。だんだん単純化されてくるんです。

原則を立てて物事を考えるということ、論理でものを考えるというのとちよつと違うわけです。

インド人は論理でものを考えますが、日常生活というのは論理的にいかないのが普通ですから、大体、日常の現象と思考というのは別だ、ということに決めているわけです。日常の現象を見るとクチャクチャなんですけれども、また、ああいうクチャクチャな国だから、そういうふうになったのかもしれない。現実には整理しようたつて出来ないようなクチャクチャなものがあるんですが、論理的にはスキッと考え得るわけです。……スキッとでもないんですが、その論理がまた非常に絢爛たるものでして、物事を一応それで考えていくというわけです。

ですから、この二つともある意味で非常に知的な世界を持っております。

### 東南アジアはベザントタイプ

東南アジアはどんなふうかと申しますと、非常にベザントタイプと言いますか、アルカイック (archaic) です。原則にしろ論理にしろ、これらはいずれも非常に豊かな文化の上に位置づけられたレジャークラス (知識層) の産物であります。東南アジアの諸社会には、そういうレジャークラスもありませぬし、大体が

アルカイックと申しますか、自然な人間の考え方、それに依存しているわけです。

東南アジアは、大体において水田耕作ですから、水田耕作に従事しているお百姓さんたちの感覚が非常に重要になっていくわけです。

では、東南アジアはアフリカなどどう違うかと申しますと、アフリカの場合は、一つの部族社会の単位が非常に小さくて、そのそれぞれの小さい社会はある意味で論理的に統合されているケースもずいぶんあり、それが幾つか集まって一つの集団をつくります。そうしますと、その中のヘテロジェニティー (不均質) が非常に大きくて、国家社会として、文化的あるいは社会的レベルで、そこを普遍的に被る何ものかが、まだなかなか出来ないわけです。

ところが東南アジアの場合にはそれがあるんです。大体、同じような文化が一つの国の大部分にディフューズ (拡散) しています。だから組織として論理的に統合されていないかもしれないけれども、たとえばインドネシアに行きますと、インドネシア語で全部通じます。あんなにたくさん、三百も違う言葉があるところで、みんながインドネシア語を話すようになったということは、もともとが同じ語族に属しているということもありまして、それと同時に、同じようなカルチュアを持っているんですね。だから一つのインドネシアというのが出来ても、その中で何となく同じようなものがディフューズしているわけです。

フィリピンでもそうですし、タイ、ビルマ、マレーシアなども、華僑の問題は別として、そういう同じようなカルチュアがより広い世界にディフューズしています。そこがアフリカなどと違う点です。アフリカの

場合は、そういうものでなくて、むしろ一つ一つの固まりが集まった、そういうような形になっています。

東南アジアは、勿論アフリカなどよりも古くから歴史に登場しているわけです。歴史の始まりを見ると、日本とあまり変わらないくらいです。そこにそういう歴史の長さというものも反映されているということが出来ます。ただ中国やインドのように、レジャークラスというものが、植民地になるまでに明確に形成されなかつた。そこに弱みがあるわけですが、この階層の問題はまたあとで話したいと思えます。

### 日本は東南アジア型に近い

では、日本はどうか。日本は、二つに分けると東南アジアと同じカテゴリーに入ると申しましたけれど、日本も非常にベザントタイプでアルカイックです。儒教などを入れまして、ちよつと外から見ると恰好が出来たようなんですが……。ところが東南アジアと非常に違っている点は、階層ではないんですけれども、社会がずつと熟しているということですね。一番上から下まで、それぞれが非常に熟して、ガツチリと築き上げられている、ということなんです。

ちよつとわかり易くイメージ化すると、A図のようになります。

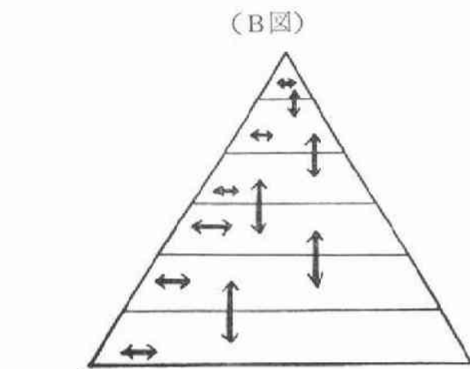
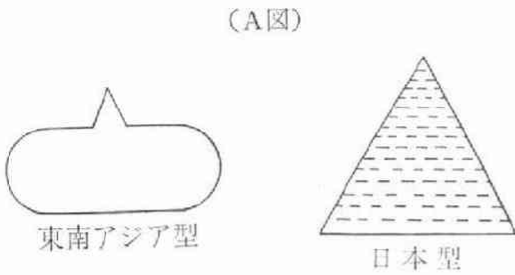
日本の場合は、階層々などというはっきりしたものは無いんですけども、社会組織においてトップから下までが、わりあい隙間なく構築されています。

東南アジアのほうは大部分がベザントタイプです。

この頃はエリートが出来ましたし、マジヤバイト王国などには、ちよつと官僚制がありました……。しかもベザントタイプの中が非常に脆弱です。

一般に社会というのは階層化によって密度を高めてくるわけです。当初、東南アジアのように一部のエリートだけが突起したアルカイックな社会だったのが、日本の場合だんだんに整然と構築されてきたわけです。私が言いますタテシステムというのは、こういう日本型の社会に非常に作用したと思うんです。

こうなるとどういうことになるかというと、上のほうが非常に洗練されてきて、全体社会のエネルギが上に向かって集中されますから、だんだんと上の洗練度が高くなるわけです。そうして、社会階層の下のはりにきまると、ちょっと東南アジアに似てくるわけです。それは田舎の人と都市の人というのではなくて、何の分野でも一流と言われるような範囲では大体洗練度が非常に高くて、三流と一流の違いはどういうことかというのと、三流になりますと、非常に東南アジアに似てきます。



ンが非常に悪いということです。インドや中国のように、一度階層が非常につきり出来ると、その階層の中のサーキュレーションやネットワークは非常によくなります。階層間のサーキュレーション(⇕)は悪いかも知れませんが、それぞれの階層の中のサーキュレーション(⇔)はとってもいいわけです。(B図参照)

ですから、インドなんかでも印パ戦争が起こったときなどは、デリーのニュースが一時間後にはケーブコモリンのトップクラスには通じているわけです。ところがデリーにある大使館にはそれが入っていません、デリーの近郊の農民は印パ戦争が行われている、ということすら知らないのです。全インドのトップ階層のコミュニケーション・ネットワークはすごいものなのです。

階層がなく緩い社会(東南アジア的)になりますと、コミュニケーション・ネットワークはほとんどないと言っているくらいです。みんな自分の水田を朝から晩まで耕やしているようなものですから、コミュニケーションなんて、あまり要らないわけです。

そういうことでして、日本もトップ階層の中のコミュニケーション・ネットワークはすごいんですけど、まあ、ちょっと三流と言われるような人といろいろ約束したりなにかすると、ヘンなことになりがちです。コミュニケーションの質が悪くなります。東南アジアのコミュニケーションの悪さに非常に似てきます。

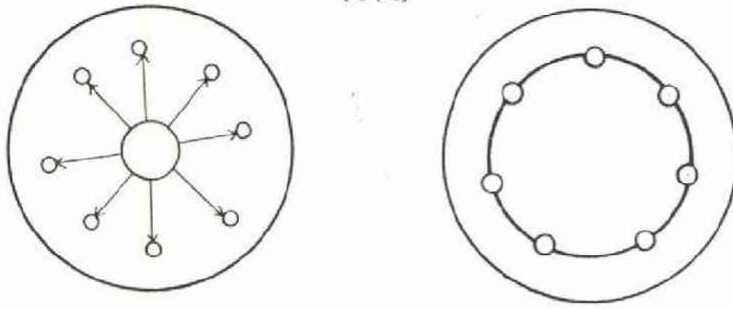
東南アジアでは、この人に言えば大丈夫、という人がほんのちょっとしかいないですね。大学教授くらいになっても、まだ、言ったことを忘れたり、「Xさんにあした、どこどこで会うから何時に来てほしいと伝えて下さい」と頼んでも、たいてい間違っって伝わるか、まったく伝わらないんです。コミュニケーションが非常に悪いんですね。

インドも東南アジアも似たように見えますけれど、インドでは、まあ、われわれ大体同じ階層の人たちと交流するわけですから、伝わらないということはほとんどない。インドで伝わらないというのは、それぞれの階層間の縦のコミュニケーションが伝わらないのです。横のコミュニケーションは良過ぎるくらいで、誰か一人インド人に会おうと、パアーツと仲間に伝わってしまう。階層内でのコミュニケーションはものすごいわけです。

一方、日本の場合、その階層内だけで、むしろ縦のシステムを使ってコミュニケーションを非常によくしているわけです。ですから、どうしたって大新聞とか、NHKとか、大企業とか、国鉄とか、そういうものが要るようになってくるわけです。横に階層があれば、そういう大何々とかいうのがなくても、コミュニケーションが保たれるんですけれど、日本にはそれがないわけです。また、日本の場合は下層のほうにコミュニケーションの悪い部分を持っていますから、コミュニケーションのいい一流企業とか、一流新聞社とか、一流放送局とかいうものが横のコミュニケーションの弱さを十分補って、全国ネットワークをつくるわけです。

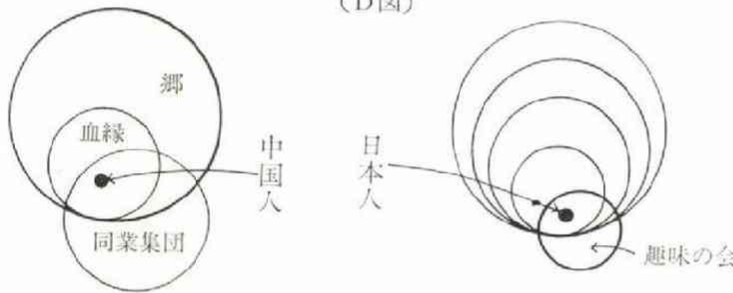
うものがありますと、全国あらゆるところにトップのクラスがいて、その階層を伝わって、コミュニケーションが流れるんです。日本はそうではなくて、むしろ中央だけがあります。一流企業とか一流新聞とか、一流はみんな中央に集まっておりまして、ここからネットワークを出して、全体のサーキュレーションをするという形になるわけです。(C図参照)

(C図)



す。中国は共産化したから、階層がないかと思うと、とんでもないことです。このあいだも、中国の社会科学の学者が来て、日本のいろいろな福祉施設のことなどをきくから、日本では、こうこう、こういう共済会があつてこうなつていて、と説明したら、「それは幹部だけだろう。平民にはないんだらう」と言わんですね。現在でも中国では、幹部とか指導者という階層が機能しているわけです。階層社会というものが、ああいう大改革をしてもなかなか変えられないわけです。また、階層がないと、あんな大きな国の場合にはネットワークできないですね。それで、中央集権が発達したんですけど、中国の中央集権と日本のタテ組織は、ちよつと違うわけです。

(D図)



以上述べましたように、中国とインドと東南アジアと日本というので非常に違うわけです。

**個人に依存する対人関係——中国**

それでは次にこれらの社会では、それぞれどういう人を信用するのかについて触れてみたいと思います。

中国の場合は非常にインディビジュアルリスティック(個人主義的)です。一般に同じ血縁に属するとか、福建なら福建という同じ郷に属するとか、同じ商売とか、そう

いう三つの集団が存在します。一人の中国人がいますと、一つは血縁集団の一員であつて、血縁集団と同郷というのはいまたく重なるわけです。そして、これら(血縁、郷)と重なることが多いんですけど、同業集団があります。ですけど、重なつても、それぞれみんな違うわけです。そういう幾つかのグループを使い分けるわけです。

中国が共産主義になつてから実態調査が出来ないものですから、これは古いパターンですが。このパターンで考えると、一般に中国人は三つの違う集団に属しているわけです。そうすると、どういうことになるかというと、わりあい個人が強くないと、こういうメカニズムは機能しないわけです。

たとえば日本では、一つの職場に個人が属して、その職場が幾つか集まつて一つの工場になり、また一つの会社になり、また産業別組合になる、というように重なつて拡大していくわけです。まあ、趣味の会、なんというのがありますけれども、それは構造的に重要でないわけです。日本ですと、同じように重なつて広がっていくわけですが、中国だとズレているわけです。

(D図)

日本のようですと、個人は別にキーポイントにならない。中国ですと、個人が非常にしつかりしていないと、「きょうは同業者の会」とか「あしたは何の会」とかいうように区別して対応しなければならぬ。いろいろな問題についてそういうことがあつて、個人が非常に重要になるわけです。

個人が非常に重要になると、どうなるかと言いますと、友人関係が大切になってきます。友人関係というのは、集団では出来ないわけです。集団で出来たと

ったら、非常にあぶない。大体、集団で友人だと思っ  
ていると、いざというときに助からないわけです。本  
当の友人関係というのは個人対個人の問題なんです  
ね。

ですから、中国人のいわゆるボン友関係というの  
は、そういう中国社会の構造に根ざしているわけです。  
中国人はよく親友を外国人に持っておりますが、これ  
もそういう構造からくるんだと思います。日本人は本当  
の友人関係が結べるんだらうか、と疑問に思う中国人  
が多いのですけれども、日本人の場合、ちょっとあぶ  
ないですね。普通は何事も起こらないときは友人だと思  
っていても、いざとなると逃げられたとか。とても  
悲しい目に遭ったときだけ、「あ、あの人は本当の友  
人だった」などとあとでわかるので、普通はわからない  
状態に置かれていたりします。

中国人の人たちの対人関係や信用というのは個人とい  
う単位に依存しています。だから、中国がいろいろな  
折衝をするときに、注目するのはつねに個人です。自  
民党の党首であるとか、総理大臣であるとか、使節団  
の一員だとかということではなく、誰々という個人に着  
眼します。

日本人はちょっと感違いして、この次行くときは、  
この人が団長になって行けばいいとか何とか言ってい  
ますけれど……。

日本の場合は集団的と言いますか、いろいろな交流  
をインスティテューショナル(組織・制度尊重主義的)  
に見てしまっているんですね。とかくインスティテューシ  
ョナルなレベルで考え易いんです。ところが、中国の方  
はずっとインディビジュアルリスティックな考え方をす  
るわけです。

### 地中海的なインドの対人関係

それでは次にインド人はどういう人を信用するか。  
インドへいらした方の多くは「インド人は信用できな  
い」との感想をよくもります。騙されたかなにかし  
たわけでしょう。では、インド人はしょっちゅう騙さ  
れているかというところ、そうではないんです。インド人  
にすれば、信用できる人と信用できない人とはっきり  
していて、信用できない人は初めから信用しないだけ  
なんです。インド人がどういう人を信用するかという  
と、一番信用するのは、やはり、血縁、婚姻関係で結  
ばれた人たちです。

ですから、インド人がオフィスを持って従業員を集  
めるとしますと、一番いい経営者は、従業員全部が自  
分に繋がってなくてもいいんですが、友人関係もあり  
ますから、自分の友人の甥とか、ともかく、従業員が  
ヘンなことが出来ないよう人間関係が自分との間に設  
定されているものだけを雇っていくわけです。ですか  
ら、ヘンなことにならないわけです。そういう関係が  
ゼロの場合は、やはり、インド人同志でもヘンなこと  
が起こるので、もともとそういうのは、信用して雇う  
からいけないんだ、ということになるわけです。

インド人のこのパーソナル・リレーションは地中海  
の社会のそれと似ています。地中海社会では血縁とか  
婚姻の関係が非常にパーソナル・リレーションに物を  
言うわけです。イタリアなんかでもそうです。たとえ  
ばローマ大学を卒業しても、いいネットワークを持つ  
ていないといふところに勤められない、ということが  
あるわけです。

ですから、インドではデリー大学出だとか、カルカ

ッタ大学出だなどというのは、全然、比較の要素にな  
らないわけです。ご承知のように日本では、東大を出  
たとか、慶応を出たとか言っています。これはインス  
ティテューショナル・ファクターというものが非常に  
機能するということです。ところがインドやイタリア  
ですと、個人と個人を結んでいくネットワークのファ  
クターが非常に物を言うわけです。

こういう違いがありますので、カルカッタ大学出だ  
からいいだろうとか、一流の会社に勤めているから大  
丈夫だろう、と考えるのは非常にあぶないんです。

日本の場合は一流の会社に勤めていたり、一流の大  
学を出ていると、そんなヘンなことはないと思うん  
で……。統計をとったわけではないんですけど、大  
体においてですね、比較の問題としてですが。

しかし、ヨーロッパでもアメリカでも一流の人とい  
うのは一般の日本人ほど簡単には信用しないよう  
です。アメリカやヨーロッパでは、ネットワークとイン  
スティテューションが両方交錯しています。日本とイ  
ンドとは非常にコントラストを持って一方に傾きがち  
ですけれども、ヨーロッパは両方をやるんですね。

私、あちらで本を出すので契約するときなんか、「一  
流の出版社だから、そんな細かい契約書を読まなくて  
いいでしょう」と言ったら、向うの友だちがみんな  
「あぶない。あぶない。どんな一流でも、どんな悪  
いことするかわからない」と言うんです。そういうネ  
ットワークに縛られていないと、インスティテューシ  
ョンだけで見ているのはあぶないという、そういう社会  
なわけです。

東南アジアもみんなネットワークです。インスティ  
テューションは全然利かないですね。ネットワークで

いく社会です。東南アジアのネットワークというのは、これまたインドなどはちょっと違うんです。

インドのネットワークは次のように説明できます。

個人が三人いて、AとBとの間に血縁関係なり、友人関係が存在すると想定すると、これがエステンドされて、Cに繋がります。A-Cの関係というのは切れない。A-B-Cがあることによって、Cは(A……C)

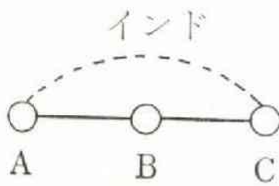
という関係をもち得るわけです。(E図)

ところが東南アジアの場合、フィリピンとかインドネシアなどでは、A-B-Cという関係があっても、Cが直接Aに繋がらない。Bを通しての(C……A)

という関係は出来ません。

出来たと思っても怪しい。効用が非常に低い。東南アジアの場合、いろいろなことをしようと思うと、たとえばマルコス大統領なんかはすごいと思うんですが、直接のパイプをいっばい持たなければなりません。インドなどではそんなに全部直接自分で持つていなくたっていいわけです。ですけれども、東南アジアの場合は、直接のパイプを持つていなければあぶない。何かするときには、その本人を呼んで、その人と

(E図)



約束するんです。第三者を仲介にしての約束は出来ない。

東南アジアではネットワークにあらゆる

ファクターを入れます。単に血縁とか婚姻関係だけではなくて、職場の関係、友人関係、ちょっと

親切にしてもらった関係、といったようにあらゆるものを入れてきます。インドほど血縁関係を、ほかの関係と質的にディファレンシエート(区別)することをしないわけです。

### エフェクティブ・ラインのない東南アジア

ですから、東南アジアはパワートと広がって繋がっているのです。日本人でも、誰かの名前を言うとき「ぼくよく知っている」とか、「ああ……」とか言う人がありますね。

こういうような質を問わないダイレクト・リレーションというのはいくらも効果を持たないんです。ですから、よく「ぼくあの人よく知ってるよ。何かあったら紹介するから」なんて言って、いざ、その人に紹介してもらっていくと、全然エフェクティブがない場合があるわけです。そういうのが多いんです。日本でも、下のほうへ行くと、みんな東南アジアみたいだと言いましたが、質をディファレンシエートしないわけですから、日本でもこういうのがあるわけです。

したがって、物事をやるときに、東南アジアタイプというのには非常に難しいんです。どこを押えればいいのか、予測が利かないわけです。こうなると直接その人を押える以外に手はないですね。第三の人に期待するということは非常にあぶない。あまり期待しないほうがいい。

東南アジアの場合、すべてがダイレクト・リレーションですから、そういう意味で、血縁関係というのがわりあいにはかなり効力を発揮します。度合の問題はありますが、ある程度そう言えるわけです。

日本では、紹介状を貰うのはタテから貰ったほうが

確かですね。上から下へ、というのがとてもエフェクティブに利くわけです。これが一〇〇%利くとすると、下から上へというのは二〇%か、せいぜい五〇%です。

ヨコへというのは、よほどの親友の場合とか、ただ知っているとか、好きだとか嫌いだとか、いろいろなファクターが入ってきますから、あまり利かないんです。しかし、タテは、嫌いだとか好きだとか何とかかっということと関係なく、エフェクティブにいくわけです。日本では、何かエフェクティブにいく線というのがあるわけです。だから、非常に重要なことをしようと思ったら、そのエフェクティブなラインを衝けばいい。これはインドや中国にもあります。どこが最もエフェクティブかというポイントがあるわけです。

ところが、東南アジアの場合はポイントがないんです。直接個別にやっていけばそれでいいんですけれども、ポイントがないので非常に難しい。それでダメかと思うと、ヘンに西欧的な訓練を受けていて、ちゃんと出来る人がいたりして非常に難しいんです。一方、西欧的な大学教育も受けて、大学のプロフェッサーになっっているのだから出来るかと思うと、出来なかつたりもするわけです。そこへまた近代的なファクターが入ってくるので、もつと難しいネットワークになるわけです。

これで一応簡単に中国、インド、東南アジア、日本の相違点を申し上げたわけですが、みなさんが接触されるのはたいていこの社会でもエリートであるわけですから、エリートについてちょっと触れておきたいと思えます。

エリートというのは、まあ中国でもちょっとその傾



向があるんですが、インド、東南アジアではいずれも英語を話します。英語を話すのが全部エリートではありませぬけれども、エリートで英語を話さない人はいないわけです。ですから、日本から大臣が行って、英語が出来ないと、あれはエリートではないのではないのか、などと怪しまれるわけです。英語はエリートのミニマムの資格になっているわけです。

英語に強い東南アジアのエリート

理由があるんですね。たとえばインドのようにいろいろな言語があるところでは、英語を使わなければ国内的にもやっていけない。

インドネシアやフィリピンでもいろいろな民族集団がありまして、違う言葉を使っているわけです。そういうところではどの言葉を使ってもアンフェアなんです。

たとえばインドの場合、ヒンディーだとタミールを使うインド人とか、ベンガリーを話すインド人にはアンフェアなんです。インドネシアでは、ジャワ人というのが全体の四五%いて、古くから歴史を持って文化の中心ですから、相当洗練度も高いわけです。そうだから、ジャワ語がいいかというのと、それは非常にアンフェアなんです。バタイとか、ミナンカバオとか、マドウライとか、バリ島とか、そういうほかの人たちにとって、ジャワ語を使われたんではまずいわけです。オランダの教育を受けたのは、ジャワのマジャパイト王国やなにかの古い官僚の子孫たちが多いものですから、オランダ語もアンフェアなのです。そうしますと、英語が一番フェアということになります。ですから、ただ英米で教育を受けたからというので

はなく、国内的な必要に迫られて英語というものが重要になってきているわけです。特にエリートというのは一つの全体社会の上層を形成する階層ですから、その中のコミュニケーションはとりわけ発達します。コミュニケーションのためにはどうしたって言語が要りますので、英語が必要になってくるわけです。

さらに東南アジアの場合非常にいいことは、国内だけではなくて、東南アジア全域のエリートと英語で話が出来るところです。マニラへ行っても、シンガポールへ行っても、クアラルンプールへ行っても、ジャカルタへ行っても、東南アジア全域のエリートの情報がほとんど集まります。

それで彼らはよく行き来するわけです。エリート層が東南アジア世界に形成され始めているわけです。

しかし、そのエリートにもいろいろありまして、さっき言いましたようにエリートだから大丈夫だと思ふと、とんでもないことになったり、逆にインドネシア人だと思つてバカにすると、ちゃんとしていたりするわけです。このへんの呼吸が非常に難しく、こういうのは長い経験と個人との関係を密にしていく以外に方法は無いと思ふんです。

質疑応答

高野 (NHK) 東南アジア人のコミュニケーション・ネットワークについていろいろうかがったわけですが、ベトナム人について、何か特徴のあるネットワークがありましたら……。

答 朝鮮半島とベトナムを、私、飛ばしてきたんですけれども、この二つは特別です。やはり中国に地続

きで、中国式の官僚制がずっと入ってきておりますので、ベトナムは、ほかの東南アジア諸国と非常に違います。韓国とむしろ非常に似ているんですね。韓国とベトナムというのは、中国の亜流のような位置づけになるかと思ふんです。

したがって、フランス人がラオスやカンボジアを植民地にしていましたときに、ラオスやカンボジア人というのはやはりベザンタイプでしたから、ベトナム人を全部連れて行ったんです。そしてフランス人の下に置いていろいろやったわけです。ちょうどアフリカにイギリス人がインド人を連れて行ったか、あるいはビルマやマレーシアにインド人を連れて行ったのと同じような位置づけにあったわけです。ベトナムは中国寄りの社会です。実際、広西省などにまいますと、町を見ただけでも、ベトナムに来たんじゃないか、という感じですよ。南中国のあのあたりからずっとベトナムまで、民族学的に言うと同じなんです。ベトナムの少数民族は別といたしまして、ベトナムというのは、一般にそういう位置づけになると思ふんです。東南アジアとちよつと違うわけです。

山内 (NHK) 日本の社会は教育の格差がだんだん解消されてきたり、あるいは所得の格差が縮小されてきているわけですが、そこでは洗練ということが起らないで、逆に日本社会全体が非常にベザンタイプになってきているようにも思われます。指導者の中にも非常にベザンタイプの人々がふえてきているように思ふんですが、これはどういうことなんですか。

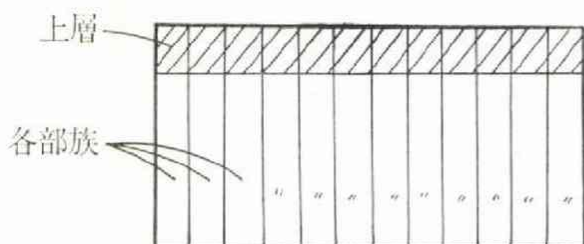
答 全人類が、いま、平等をめざしてすごい運動をやっているんで、そっちのほうへ行く流れとしては、

日本なんか一等進んでいると思うんです。それは別として、国際的な場で考えてみますと、構造的に分析しますと、一つの社会の中に階層がないと、ほかの社会と結びつきにくいんです。

たとえばスケールは小さくてもアフリカにはいろいろな部族がいます。その部族はそれぞれ独立しながらまとまって集団をなしているわけです。そうしますと、なかなか集団の中での各部族間の関わりが出てきにくいわけです。ところが、どこにでも上層は出来るということなんです。

横に書きますとF図のように、各部族があり、そこに階層ができます。そうしますと、上層にいる人は、各部族の一員であると同時に、上層同士のグループの一員という意識を持ちます。そして上層同士の人たちがそれぞれのアイ

(F図)



デがそれぞれのアイデンティティを持って結ばれるわけです。こういう階層がないと、ほかの集団と結ばれにくくなるわけです。

日本もだんだん階層がなくなつて、国際的に結ぶメカニズムがなくなるのではないかと、ちょっと私、心配するんですけれども。

一般的にトップでも、それぞれの専門

分野でもいいんですけど、そういう人たちが横に結びつくことが有利なんです。たとえば、日本でも自然科学者はそういう方向に行っているの、非常にいいことだと思つてすけれども、平等思想があるものから、一流自然科学者も三流の自然科学者も同じように研究費を貰つてしまつてす。一流はとっても苦しい立場になるわけです。

構造的に見ますと、全部同じにしてしまつていうことは、日本を孤立させる一つの要因になるのではないかと。いいことか悪いことかは別ですが、構造的にはそういうことが言えるわけです。

山内(NHK) 最近、日本の大学にも外国人教授を入れる、というのが出てきたわけですけれども、結局、日本の大学社会なり、あるいは日本の官僚社会と言いますか、それが非常に反発して、どうもうまく定着しない。これはやはり日本の社会、特に大学社会が、まだ階級制を持たないゴチャゴチャした社会というところに原因があるのだろうか。

答 それはそうですが、そういう特殊な分野になりますと、ほかの理由もあります。たとえばヨーロッパの大学ですと、中世から発達してきたわけで、ウプサラ大学などというのは五百年祭を去年やったのですけれども、大学の歴史が違うわけです。まず、大学があつて、それからあとで政府に組み入れられているんです。日本は政府が先にあつて、大学をつくつてやったわけです。だから日本の大学というのは政府の固い殻の中に入つてしまつていっているわけです。

山内(NHK) 階層としてはあるわけですね。本来、外国の大学と連携し易く、また教授の交換も容易な形であるべきなんでしょうけれども、わが国の場合

そうでない……。

答 学者としてというのと、その中にいる人間とまた大学というインスティテューションは別なんです。階層といった場合に、むしろインスティテューションではなくて、研究者として見ればいいわけなんですけれどもね。

インスティテューションが外国人を入れるかどうかということ、世界の第一線にいる自然科学者としての意識で、ほかの国の自然科学者と結ばれているというのとはまた別なことです。

そういうふうにインスティテューショナルに考え易いのが日本の文化の特性だと思つてす。大学というのは上層とは限らないんです。単なるインスティテューションですから。

山内(NHK) ロンドン大学の場合と違って、日本の大学では外国人が内部の一員として組織にも、カリキュラムにも自由に参加するということはないですね。

答 そうです。それはもう社会の違いでしょうね。だって向こうのプレスだって、外国人ばかりのがありますよ。それぞれの職業分野の伝統ということもありますね。イギリスの場合は、特にアメリカ人と同じで、言語のハンディキャップがないから、そういう意識もまた強いと思つてす。日本人の場合は、単に日本人が閉鎖的だというだけではなくて、その生いたちの歴史と、日本語だということなども重なつていっていると思います。

大貫(サンケイ) 東南アジアはどちらかというところ、インディビジュアルだ、ということには賛成なんです。ところが欧米の個人主義と違うのは、お互い同士

をあまり規制しないところだと思ふ。規則だとか法律だとかいうものに縛られるのを非常にいやがる。

たとえば日雇いの男女がトラックに乗ってやってきて、五、六人いて仕事を始めると、中に二人くらい、全然働かないのがある。ただ見ていてだけで、「きょうはわたしは働きたくない」で通す。ほかの人たちはそれを咎めもしない。あくる日になると、気分がよくなったのか、そっちが働いて、きのう働いていたのが働かない。しかし彼ら同士では、日本人あるいは欧米人みたいに「おまえ、働け」と強要は絶対しない。そういうふうな人間関係において非常に緩やかなものがあるような気がするんです。

そうすると、共産主義というものは一体、東南アジアで機能するかどうか。私は、どうもなじまないように思うんです。カンボジアにおいても多分ダメじゃないか。ラオスもダメじゃないか。血縁集団や同業集団、あるいは個人が強い中国でもどうもなじまないような感じがする。こうした点についてはどうお考えですか。

答 共産主義というのは仏教と同じで、とてもローライズされるんですよ。ソ連の共産主義とか、中国の共産主義とか、カンボジアの共産主義とか、みんなローライズされてしまってますね。だから共産化というところも、いろいろインテリゲンチヤンが要るわけで、ソ連のような共産主義にはなりっこないですよ。日本なんかはある意味で中国より共産主義みたいな社会ですよ。みんな同じで。(笑) 共産主義を名乗らなくても、北京より東京のほうが共産主義みたいな日常生活の行動が見られるわけです。共産主義という考え方と、社会とか文化というのはまた違うんです。

すね。

国際政治において、共産主義がどうのこうのというのは、私の言っているレベルと違うわけです。だからこそ違う学問として存在し得るわけで、どっちも同じだったら、国際政治も文化人類学も要らなくなるんです。多角的にやっているわけで、一緒に扱うことはちょっと難しいんです。

井出(個人) 上層がないと国際的な結びつきのメカニズムが出来ない、という話がどうもよくわからなないのですけれども、三流同士の交流だとか二流同士の交流というものが、世の中のために必要であると思うのだが……。

また、いわゆる工学的な意味での通信網の発達とネットワークの関係についてどう考えるべきなのか。

答 さっきはわかり易い例で、エリートとか上層と云いましたけれども、それは社会全体のどこのセクターでもいいわけです。労働組合でもいいし、自然科学者でも物理学者でもいいし、あるいはフィルムメーカーでもいい。とにかくその人たちが一般社会の人たちと際立って違っているということ、すなわちプロフェッショナルな世界を持っているれば、ほかのそういう人たちと結びつき易いということなのです。社会の性格がフィルムメーカーも、新聞記者も、学者も、みんな同じようだと外とは結びつきにくい。それぞれが際立ったロールを持っていると、社会全体の中がいろいろな分野に分かれます。そうすると、ほかの社会のそういう分野の人と交流が非常にやり易くなって、結ばれるということ、必ずしもエリートとは限らないわけです。

東南アジアの場合は、各分野ともまだとても未熟で

すから、こういう場合は、エリートということになります。先進国のような形態を持った場合には、プロフェッショナル・グループになると思います。上層とか、大臣、官僚の力は相対的に弱くなりますから、むしろプロフェッショナルなネットワークが世界を結ぶということになると思います。

日本人全体が国際化しようとしていても、全然国際化なんて出来ないわけで、それぞれのプレスの方とか、あるいは物理学者同士とか、あるいは労働組合のリーダーたちとか、専門で結ばれるのが一番機能的な結びれ方であり国際化である、と私は思うのです。ただ仲良くしましよなんて、そんなに敵は甘くないですよ。(笑) 自分たちと同じような実力を持っていて、しかも意見を交換することがおもしろい、というときに初めて成立するわけです。

テクニカルな電話とか無線とか、そういうネットワークと、いま私が言ったネットワークとは違うわけです。テクニカルなネットワークが発達しているからって、社会的なネットワークが発達するとは限らない。その人たちの生活にとって、あるいはその人たちの仕事にとって最も重要な情報は、必ずしも一般の情報の中にある場合が多いわけでしょう。たとえば、政治家の動きなどというのは、新聞やNHKを聞いていても本当にはわからなかつたりするわけです。そういうのはテクニカルなメカニズムではこないわけです。やはり、パーソナルなネットワークから入る。「まあ、あの人に会ったら本当のことがわかる」ということになるわけでしょう。

幾ら通信網が発達しても、キーニュースと言いますか、本当に実情を理解するために自分にとって必要な

ニュースは必ずしも入ってこない。要らないのばかりいっばいきちゃって、かえってそれが邪魔になって重要なのが入っていても見過ごしてしまおう、とかいうことにさえなりがちです。

清水(サンケイ) 日本では偉い人もだんだん庶民的になって階層がなくなりつつあるという現象がある。これは先生のお話ですと、東南アジア的这种感じですけども、明治以後敗戦までの日本は無階層社会ではなくて、原則あるいはイデオロギー的な、中央集権的な国家だったわけですね。それが敗戦で一度否定されて、ずっと下のほうの庶民レベルのものが上のほうへ浸透していったような感じですけども、現在上上がってきている庶民的なものと、敗戦で消えたと言いますか、一見壊されたようなものと、どっちが一体、われわれにとって本質的なものなのか。

答 明治の頃のイデオロギーとか、そういうものというのは、上から支配者が出たものであって、日本人全般が持っているものとは違うわけです。支配者がそういうことを出し易かったというのは、明治というのは、何といってもまだ日本社会が近代的に固まっていな時代ですから、日本内部が封建制から移行したためにガタがきているわけで、ガタがきた社会でパターッとやるほうが権力を行使し易いんですね。高度成長で隙間もないほどガッチと出来た社会というのは、もうどうにもしようがない。明治時代にそういうことが出来たというのは、日本人がそうだったというより、社会というものが近代国家としてピシッと出来上がる前で、いろいろ動かし易かったからです。中がキチンとなっていないから、上に立った人が何かやろうという場合に非常にやりよかったです。

下がピシッリ築き上げられてしまおうと、なかなか物事が出来ないですよ。中がよくまとまっていなところでは強権発動が非常にやりいわけ、開発途上国なんか、みんなそれが出来るわけです。先進国の場合、なかなか人が動きませんし、社会全体が簡単に動かないようなシステムになっているんです。だから、こういうように社会が出来上がってしまうと、イデオロギーでパターッとやろうなんていうのは幾ら苦勞しても無理だと思えます。

清水(サンケイ) 現在の日本の社会は先進国型の社会になってきたんだということですか。

答 日本の社会の形成過程は技術的にはとても遅れていましたけれど、江戸時代、たとえば十七世紀から現在までの社会の熟し度というものは、大体、先進国と比例しているんですね。技術的には英米よりも非常に遅れていましたけれども……先進国に追いついたというのではなくて、大体、並行しているんです。そして、日本の場合は貧富の差が中国やインドほどなかったもので、非常に近代化がやり易かったわけです。ソ連とか中国とかインドというのは大きいこともあるし、貧富のレンジがひどかったもので、ああいう革命が起こり得たわけです。ですから、日本のような社会になつてしまおうと、もう強権発動も出来ないし、革命も起らない。上からも下からも出来ないという、そういう構築のされ方になっているのではないかと思うんです。

大貫(サンケイ) 私は、タイに五年間いたので、よく向こうの社会を眺めてきたつもりなんですけれど、中根さんは東南アジアにはあまり階層がない、と言われたようですが、タイに関する限り異論がある。

あの国の言葉でエリート層と言いますか、指導者層、金持ちなど、権力のある連中は「ナナイ」と言う。これらに引張られる連中は「パーウ」と言い、その間の隔絶は大変なものです。どのくらいのクラスまでが「ナナイ」というかというところ、新聞記者は「パーウ」となる。しかし、外国特派員ということでは「ナナイ」の扱いをしてもらえるわけです。

今後、社会の大衆化が進めば、それは徐々になくなっていくかもしれませんが、いまのところは厳しい階層別があって、「パーウ」から「ナナイ」はまらず行けない。また「ナナイ」から落ちることはない、ということになっていると思うんですけども、いかがでしょう。

答 それはこういうことです。身分差というのはどこでもあるんです。あなたが、いまおっしゃった自分とはどちらかわからないというのが、グレイディングとかランキングということなのです。

社会というのはよほど特殊な社会でない限り、大体ハイラルカルに並んでいるんです。ですからタイでもインドネシアでも敬語を日本よりもっとすごく使い分けるんです。その境目が、どこからどこまで移り目ははっきりしない。これがグレイディング(grading)なんです。上下は、ほとんどの社会にあります。上下のない社会も、未開社会の中には少しはありますけれど、ほとんどの社会には上下関係があるんです。こうしたグレイディングとかランキング(ranking)とストラティフィケーション(stratification)というのは概念的に違うんです。ストラティフィケーションという場合は、その移り目が非常にはっきりしています。下の人が上の人にいろいろなことするという関係だけでは

なくて、まったく知らない人が見ても、パッと一目で、あれはあっち、それはこっち、とわかるくらい、マナーもいろいろと違うわけです。そして、そのそれぞれが全体として一つの行動様式を持っています。

昨年、多量暮した東京をあとに福岡市へと移った。ローカルのニュース・キャスターに起用されたためである。

私は今年の歳男で民放ローカルのキャスターの中では高年に属する。だから、在京時代には再び現場の仕事をする事にならうとは思わなかった。むしろ、放送記者としては業余、古代を取材していた。北部九州は古代史のファンにとってはまさに古代銀座であることはいうまでもない。社は一九七二年暮れに高野信社長（現テレビ朝日社長）名で日中文化交流協会に中国科学院長郭沫若氏宛の文書を託している。邪馬台国問題など古代史についての、いわば「日中邪馬台国シンポジウム」開催の申し入れであった。

社として中国に正式文書を出した以上、私たちも邪馬台国に関して勉強しておく必要を感じ、私も記者のはしくれとして、さわりたくない邪馬台国問題にとりかかった。三世紀の魏志倭人伝、二千字（華文）の記録をどう見るかというのだが、私は日本列島についての外国人による最初のジャーナリスト的な記録文としてとらえた。東京で思いめぐらし、関西を歩き、北部九州の地を踏んだ。新中国の発行した正史「史記」から「旧

### 古代と現代の間

う一つ重要なことは全国的にそれが存在しているという事です。タイの場合おっしゃったようなすごい人たちがいるのはバンコクでしょう。ジャワだとジョクヤカルタと

唐書」まで百冊近く買いこんで日本列島についての記述を読みあさった。

三千枚近い原稿をかかえ、昨年、九州へ来てからは現場の人間として日中交流やツクシの古代発掘のニュースを取材し、読み、語りかけてきた。

#### 一 郎

（九州朝日放送）

かつて、この地に学んだ郭沫若氏世界のニュースも私が伝えた。（六月）  
太宰府では飛鳥より古いとされる大瓦が発見された。（十一月）

#### 壱 岐

では、古代ツクシの現場を取材して、かの邪馬台（壱）国は発見できたか、と聞かれると困る。が、いまの私の結論はこうだ。

邪馬壱国は関西でも九州でも七万戸の超大国だ。

しかし、強くはないようだ。ヒミコは大女王か？

拙論「邪馬壱国広域説」  
（季刊誌「邪馬台国」七九・六）

倭人伝の対馬についての記述はテレビ中継も及ばないくらいだ。

「土地、山険しく、深林多し、道路禽鹿の小径のごとし……」

この時代の中国情報の精度は自然描写だけだろうか。（七九・六）

か、ジャカルタとか、スラカンタとかいう特殊なところにおいて、全国を被わないわけです。階層社会、ストライクファイケーションのある社会というのは、全国どこへ行ってもそういうのが存在していることを指すわけです。

タイとかインドネシアには身分差というのがあります。あのくらの歴史を持つ社会ではどこでも、昔の王朝に仕えていた人とか、大臣をやっていた人とかがいて身分差があります。

極端な例をとれば、インドでブラーミンに生まれたら何代経っても、千年経ってもブラーミンの下になるなんていうことはあり得ないわけです。これは典型的な階層の場合です。しかし、ハイラルカルな構成になっているという実態は、ほとんどの社会に存在するわけです。そこでそのハイラルキーがグレーディング、あるいはランキング式のハイラルキーか、あるいはストラティファイされたものが問題になるわけです。そういうところで構造というものが違ってくるわけです。

日本では、江戸時代がきつとそうだったと思うんです。タイのような身分制でしたが、作られた階層だから、江戸時代が終ると、たちまちにしてダメになっちゃったんですね。作られた階層ですから、日本の上層は経済的な裏打ちがなかったから、結局なくなっちゃったんですけれども、たとえば韓国のヤンパンは階層です。ヤンパンは城下町だけに住んでいるわけではなくて、朝鮮半島全域にいます。そのヤンパンの中から李朝の官僚を出していたわけで、朝鮮半島のヤンパンのほうがより典型的なストラティファイケーションです。（16ページへ）

長文であれ短文であれ、文章の基  
本は感動であると思っている。読者  
に感動を与えない文章は、いかに美  
辞麗句で飾り立てても、単なる文字  
の羅列に過ぎない。いうまでもない  
ことだが、この場合、感動とはお涙  
頂戴の美談調を指すものではない。  
怒りであっていいし、悲しみであ  
っていい。もちろん喜びであれば、  
なおさらいい。要は心を揺さぶる文  
章である。そうした  
文章を書くには、ま  
ず書き手が事象に対  
して心を揺さぶられ  
ねばならない。木の  
葉のそよぎにも何か  
を感じとる感性が大  
事だ。

## 共感の場を

~~~~~

そして、自分の感  
動(怒りや喜びや悲  
しみや)をできるだけ正確に伝える  
ために、何がしかのテクニクがい  
る。  
人間、もっとも重要なことをしや  
べるときは、相手の耳元でささや  
く。恋を打ち明けるのに大声を出す  
ヤツはいないだろう。静かにしゃべ  
りかけるほど相手の心にしみ通っ  
ていく。  
政治、経済、外交、社会など毎日、

## 林 芳典

洪水のようにニュースがかけ抜けてい  
く。その中から心ふるえるニュースを  
見つけ、手を伸ばしてつかむ。  
この心のふるえを、いかに静かな語  
り口で、もっとも効果的な方法で読者  
に伝えるにはどうすればよいか。これ  
が私にとって最大の苦痛であり、同時  
に仕事のやり甲斐になっている。  
だから、いわゆる物知り顔に古今東  
西の名作や名言を引用したり、知識め  
いたものを切り売りする類いの  
コラムを、私はとらない。そう  
いう引用や切り売りをするこ  
とがあっても、それはあくまでよ  
り効果的に感動を伝えるための  
道具に過ぎない。物知り顔はし  
ばしば逆効果を招く。  
百人よりは千人、千人よりは  
万人の読者がともに怒り、悲し  
み、あるいは考え込んでくれな  
いか、が願ひなのである。  
学者ほどの学識もなければ、作家ほ  
どの文才もない。私の文章の存在理由  
といえば、読者に共感の場を提供する  
ことしかないと思っている。

(毎日新聞社論説委員)

「編集手帳」を書き始めたころ、先  
輩の村尾清一さん(よみうり寸評子)  
から、コラムニストはゴールのないマ  
ラソランナーだという名言を教えて  
もらい、なるほどと感心、ただちに忘  
れてしまったことがありました。それ  
から五年、ときどき息切れ気味のこと  
もありますが、何とか一日一コラムの  
ペースが続いているのは、さて何の力  
によるものだろうと考えて、はたと思  
い当たるのは、小生の  
その忘れっぽさです。

というのは、「本当

にあなたは編集手帳の  
担当者なんですか」と  
いったげげんな顔(あ  
るいは声)をされるこ  
とが、よくあるからで  
す。たとえば、その日  
のコラムを書き上げて

## よき忘却

~~~~~

ほっとしているとき、ばったり社内の  
若い友人に会い、「やあ、今日のテー  
マは何でしたか」などと聞かれ、「う  
ーん、あれ、何だっけ。あるいは、翌  
日出社したところを見計らって読者から  
電話がかかります。「あ、う、きょう  
の編集手帳のことなんですが」「えー  
と。どんなことが書いてありましたっ  
け」。いや、これこれの問題ですと言わ  
れれば、それでも結尾の文句まで、だ

## 森脇逸男

いたいは思い出せるのですが、きょう  
の手帳というだけでは、一向に頭に浮  
かんできません。そんな経験がしばし  
ばで、ちよつぱり脳が弱いんじゃない  
か、と心配になったこともあります。  
もっとも、人間の脳みそとは容量の  
限界が決まっています、不要な事柄はど  
んどん忘れることになっているよし。  
一度書いてしまったコラムのことをあ  
れこれ考えたところで始まりません。

その点、小生の頭脳は新陳代謝  
の機能の面では、はなはだ健全  
なのだと思ふことにしました。

実際、余計なことをどんどん  
忘れることができるなら、胃に  
穴があくことも、神経に変調を  
きたすこともありません。そう  
考えると、物忘れ万歳、忘れっ  
ぽさに乾杯。これからは毎日、  
筆を置いたげに、「ボナ・オブ  
リーブオ」(よき忘却)と唱えようか  
なとも思っている次第です。

(付記、実はこの原稿を注文された  
ことをすっかり忘れていました。従っ  
て以上は、物忘れ癖にあきれ返りなが  
らの忘却礼賛の弁です)。

(読売新聞社論説委員)

コラムを書くコツについてさる先輩はこう教えたそうす。

「知っていることを知らぬ振りで書き、知らないことを知ったか振りをして書くことだ」と。

人づてにその話を聞いたときは、言い得て妙だと、思わずひびきをたたきました。といっても、当方などは後者の方、つまり知ったか振りで書くことばかり。なんだかんだで十年近くになりまして、原稿を書くよる恥をかく、汗をかくという日ばかりです。

### 知ったか振りの日々



この作業で何が一番大事かといって、健康であることぐらゝい大事なものはないようです。体の調子はその日のコラムの出来を左右するのは間違いありません。よくしたもので、体が快調だと、朝、新聞をひろげ、さあて何を書くうかというときテーマの方が向こうから飛び込んでくる。題材になる紙面の活字がむっくり起き上がって、ココダココダと手招きしてくれる感じになる。そんな日は、題材が二つも三つも浮かんで選択に困るほどで

す。

逆に二日酔いの朝（これがしょっちゅうなのです）などは、さあ、いくら紙面をにらんでいてもテーマがみつからぬ。

しかしこればかりはだれも助けられないし、救いを求めるわけにもいかない。つらい商売です。

### 石井英夫

亡くなった大先輩・細川忠雄氏（よみうり寸評）のエッセーのなかに、ご自分のコラムを「どうだ、うめえだろ、名文だろ」と自惚れた」という文章がありまして、そのお気持ちには痛いほどわかるという気がします。

つまり――、だれも助けられないし、助けを求めすることもできないから、そうやっておのれでおのれをシッタし、ゲキレイしているのだ。

そう励ましつつ、あの名コラムニストも孤独で厳しい作業をつづけられたのだ、そんなふうに見えるのです。

（サンケイ新聞社論説委員）



「筆洗」を担当してから七年半になる。私は書き溜めができない性分で、毎日一本（土曜日は二本）書く。「石の上にも三年」というけれど、いまだに、締切りが切迫して時計の針をみながら貧乏ゆすりして書き上げることがよくある。何年やっても同じこと、われないが、あきれる。

書きながら興奮して胸がドキドキすることがある。それはたいいてい、調子よく筆が走るときで、あとで診療所へ行行って測ってみると血圧が上がっている。こういうと、いかにも健康によくない仕事のようだが、一日一本コラムを書くのは毎日排便するのと同じで、とにかく一本踏ん張って出せば、精神衛生にはよい。

### 覆面の楽しさ



日曜日には努めて郊外を歩く。それが健康保持にもなっているが、俳句をつくるのと、季節もののネタを拾うのが主目的で、週に一回か十日に一回の割で、季節ものを書く。

こんなことを十年一日のごとく繰り返しているうちに、一つ特技が身についた。傍らでだれがなにをしゃべっているかと、テレビが大相撲やプロ野球

をやっているように、いつこらに気にならず書けるようになった。人間の耳は必要なものだけを入れ不要なものは受けつけぬようにできているらしい。

ただ、毎日こんな仕事をしていて、ロクに読まずに夕方に積んどく本がやたらと増えて困る。自宅の書斎は、床まで本でふさがって足の踏み場もない。混沌としかいいようのない状態がずっと続いて、手のつけようがない。まあそれは我慢するにしても、その日暮らしのよろず屋稼業をしていると、自分がなにをしているのかわからなくなる。専門がなくなると、だんだんよろず屋が板についてきたと思うと、やはり寂しい。

### 堀 健三

同僚が「ぜいたくいなよ。よろず屋も専門の一つだ」などという。そういえばそうかもしれない。よろず屋をしておかげで、顔も知らない多くの読者と心が通い合う。覆面には覆面の楽しさがある。

（東京新聞論説委員）



(13ページから)

日本の武士は政治的につくりましたから、少し弱い。でも、日本にああいうシステムを導入したということは、日本全体を統合する意味において非常に効果的だった、ということが言えるわけです。

大日向 (日経映画) 言葉の問題とかプロ同士の接触とか、いろいろおっしゃられましたけれども、去年、福田さんが東南アジアに行つて、ASEANと心と心のふれ合いなんて言ったんですけれども、一体、その中身はどんなものなのか。権力の座にある連中同士のふれ合いにすぎないのか。(笑)

答 それは日本的なんでしょう。権力のあるもの同士の心と心のふれ合いだったら、日本文化ではないから……。

大日向 (日経映画) 本当に心と心のふれ合いなんていうのが出来るかどうかですね。私も英語を不自由なく、日本語と同じように喋るといえるのは不可能だろうと思つてます。そういう点から考えると、アジアは一つだとか、心のふれ合いなんていうものが、単なるキャッチフレーズにしかすぎないのか。そのへんどんなものでしょう。

答 まあ、キャッチフレーズという失礼なんでしょうけれど、少なくとも自分としての気持はこうだという、一つのエクスペリメンションにすぎないのではないんですか。別に、そんなに悪いことでもないんですね。(笑)

東南アジアの人たちは、何でも受け取り方がファーストとしていますから、インドへ行つて「心と心のふれ合い」と言ったら「心とは何だ」「ふれ合いとはどう定義するか」なんてみんな言うでしょうけれど、東南

アジアはそういう文化ではないから、ファーストとして、「なかなかいいじゃないか」って、東南アジアだったからよかったんではないかと思つてますよ。(笑)

◇親しまれる会報をつくります

投稿、寄稿にご協力

新発足の会報委員会(委員長 小林理事)は、7月2日(月)初会合をもちました。会員の皆さんにより親しまれる会報づくりを基本に編集することで、委員の意見が一致し、もっと会員の消息やゲストのスナップ写真などを多く使つて紙面をつくろうということになりました。

そこで、次号からは「五行告知」(仮称)欄を設け、会員の方がたの転居、転職はじめお嬢さんの結婚とかお孫さんの誕生、最近の愛読書、旅行、出版予定などの近況を載せたいと思つてます。

もちろん、いくら親しみの湧くページをつくろうとしても、会員の皆さんのご協力がなければ不可能です。こうした小さな地道な積み重ねの一つ一つが、クラブに魂を入れていくことにも繋がると思つてます。

「会報」を見捨てず、「五行告知」への投稿をお願いいたします。なお、この欄では従来「大使館だより」として載せていた大使館の広報担当者の紹介等も扱かいます。

また、「五行告知」とは別に、取材旅行記、随想、クラブへの要望(会報の編集も含め)等の寄稿も歓迎します。

投稿、寄稿の詳細は事務局の伊藤まで (五〇三) 二七二。

ちょっと日本も、底辺になると、東南アジア的ですからね。(笑) (54・5・23 文責・編集部)

計報 長野正会員(大分合同新聞社代表取締役社長)が、六月十六日(土)、じん不全と呼吸不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

七月の行事

12日(木) 正午～午後2時 森山欽司運輸大臣昼食会 クラブ宴会場

17日(火) 午後2時～4時 シリーズ研究会『アジア新時代』小倉貞男読売新聞記者クラブ記者会見室

25日(水) 午後5時～7時 『チャイナ・シンδροーム』試写会 プレスセンターホール (10F)

26日(木) 正午～午後2時 河本敏夫自民党政調会長昼食会 クラブ宴会場

七月一日現在の会員状況

- 法人会員 一四二社
- 基本会員 六一一人 個人会員 七八九人
- 法人・個人賛助会員 四〇社 一三三人
- 特別賛助会員 五二人 名誉会員 八人
- 計 一八二社 一、五八三人

会報委員長 小林淳宏 委員 山崎英祐、桂敬一、栗田格  
連絡 伊藤 (事務局) 五〇三 二七二